

三井家伝来小袖服飾類に関する服飾文化史的研究
— 現存遺品と円山派衣裳下絵との関係を中心に —

A Cultural and Historical Study on Kosode Kimonos Handed Down in the Mitsui Family
— Focusing on the Relationship between Existing Kimono Relics and
Maruyama Costume Sketches —

植木 淑子*¹⁺, 長崎 巖*²⁺, 福田 博美*³⁺, 両角 かほる*⁴⁺, 菊池 理予*⁵⁺,
Toshiko Ueki*¹⁺, Iwao Nagasaki*²⁺, Hiromi Fukuda*³⁺, Kahoru Morozumi*⁴⁺, and Riyo Kikuchi*⁵⁺

*1 文化学園服飾博物館 東京都渋谷区代々木 3-22-7

Bunka Gakuen Costume Museum 3-22-7, Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 共立女子大学 家政学部

Faculty of Home Economics, Kyoritsu Women's University

*3 文化女子大学 服装学部

Faculty of Clothing Science, Bunka Women's University

*4 泉屋博古館分館

Sen-oku Hakuko Kan

*5 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: The purpose of this research is to demonstrate the relationship between the designs of the Maruyama school and the characteristics of designs and textile techniques of *kosode* handed down from the Mitsui family, known to be wealthy merchants during the Edo period. This research also investigates how *kosode* handed down from the Mitsui family can be evaluated in the cultural history of clothing.

This year, research took place on (1) *kosode* owned by Mitsui Memorial Museum, (2) *kosode* owned by Rakutouihoukan, (3) designs of the Maruyama school owned by Kameisan Daijyo-ji, (4) Maruyama school handicraft designs entrusted to the Kyoto National Museum, and (5) *kosode* owned by the Fukuoka City Museum. The result was a better understanding of the actual conditions of *kosode* and designs, including information that was previously not known to exist.

はじめに

本研究は、江戸時代の豪商として知られる三井家に伝来した小袖類について、意匠・染織技法・生地などの特徴、円山派の下絵との関係などを明らかにし、三井家伝来の小袖類が服飾文化史の中でどのよ

*1) t-ueki@bunka.ac.jp

うに位置づけられるかを考察することを目的とする。

2008年度に行った調査の結果をふまえ、今年度は(1)三井記念美術館所蔵の小袖類、(2)洛東遺芳館所蔵の小袖類、(3)亀居山大乗寺所蔵の円山派衣裳下絵、(4)京都国立博物館寄託の円山派工芸図案、(5)福岡市博物館所蔵の小袖類についてそれぞれ調査を行い、以下のような結果を得た。

(1) 三井記念美術館所蔵の小袖類

三井家伝来の小袖類は、文化学園服飾博物館に所蔵されていることが知られている。このたびの調査によって、円山派衣裳下絵と関連のある北三井家伝来の小袖類 5 領(2 領は引き解き)が三井記念美術館に所蔵されていることが明らかとなった。

- 1) 生地については綸子を用いたものが3領、縹子を用いたものが1領、縮緬を用いたものが1領ある。綸子と縹子が多用されていることは、三井家伝来の小袖類に共通する特色を示している。綸子の中の1領は、三井家の特有の鶴丸模様である。
- 2) 染織技法については、刺繍のみによるもの2領、刺繍と鹿の子絞りを併用したもの3領があり、ここでも三井家伝来の小袖類に共通する特色が見られる。
- 3) 刺繍の色糸は、ほとんどが無撚りであるが、一部に撚り糸を用いている。駒縫の金糸の綴じ糸は、ほとんどの場合、赤が使用されているが、青の使用も認められる。立体感を出すための肉入れも見られる。これらの技法は、幕末から明治時代初期の特徴である。
- 4) 鹿の子絞りは大小の粒を使い分け、それぞれの粒の大きさが揃っている。
- 5) 意匠については、松、竹、梅、波などが取り上げられている。いずれも三井家伝来の小袖類や円山派衣裳下絵によく見られるモチーフであり、それぞれの表現や構成などにも共通性がある。
- 6) 「竹模様小袖」は地色と繡糸の色が文化学園服飾博物館所蔵の「竹尽し模様打掛」ときわめて類似している。
- 7) 「連観院」と記された畳紙に包まれた小袖類が4領あり、連観院とは北三井家9代当主高朗夫人・喜曾(1839-1883)の法名である。
- 8) 北三井家9代当主高朗夫人・喜曾については肖像画が残されており、「波、柴舟模様小袖」はこの肖像画に描かれた小袖と一致する。

三井記念美術館所蔵の小袖類は、着用者が明らかなものが認められることから、制作年代を推定することができる。9代当主高朗夫人・喜曾の生没年から推察すると、江戸時代末から明治時代初めにかけて制作されたことが窺われる。

(2) 洛東遺芳館所蔵の小袖類

洛東遺芳館は、京都の豪商であった柏屋(柏原家)を母体とした施設で、柏原家の伝承品を所蔵している。この洛東遺芳館には、文化学園服飾博物館所蔵の三井家伝来の小袖類ときわめて類似する小袖が所蔵されていることが知られている[1]。小袖類15領、帯2筋を調査したが、円山派衣裳下絵と密接な関係をもつ小袖類は、「水辺に春の花鴛鴦模様振袖」「三笠山模様振袖」「花の丸、巻水模様打掛」「梅樹模様振袖」「枝垂れ桜模様打掛」「千羽鶴模様小袖」「西王母模様小袖」の7領である。

- 1) 生地は、綸子が6領、縮緬が1領である。綸子が多用され、1領については三井家の特有の鶴丸模様である。

- 2) 染織技法は、刺繍のみを用いたものが1領、刺繍と鹿の子絞りの併用が2領、刺繍と鹿の子絞りに摺箔を加えたものが3領、鹿の子絞りを主として刺繍を加えたものが2領である。
刺繍と鹿の子絞りを多用し、さらに摺箔を加えたものも認められ、三井家伝来の小袖類に共通する特徴を示している。
- 3) 刺繍は、立体感を出すための肉入り、芥子繡など江戸時代後期から明治時代に流行した技法が見られる。鹿の子絞りは粒が揃い、大小の粒を意匠によって使い分けている。
- 4) 「水辺に春の花鴛鴦模様振袖」の意匠は、文化学園服飾博物館所蔵の「山桜に鴛鴦流水模様打掛」と「藤棚に山吹流水模様打掛」を組み合わせたものである。「藤棚に山吹流水模様打掛」については、亀居山大乗寺所蔵の円山派衣裳下絵とも一致していることから、下絵が現存しない小袖類についても元は下絵が制作され、さらに複数の下絵の一部を組み合わせる新しい意匠が生み出されたことが窺われる。
- 5) 「花の丸、巻水模様打掛」は30種もの草花が表現され、小袖の模様として通常は取り上げられない時計草、河骨、鹿の子百合などが見られる。これは、文化学園服飾博物館所蔵の「御簾に草花蝶模様打掛」、「柴垣、草花模様打掛」、亀居山大乗寺所蔵の「花筏模様衣裳下絵」、「檜垣に草花模様衣裳下絵」に見られる草花の種類と類似している。
- 6) 「三笠山模様振袖」の意匠は小袖全体を画面とし、きわめて絵画的に表現されている。文化学園服飾博物館所蔵の「山桜に鴛鴦流水模様打掛」、「藤棚に山吹流水模様打掛」と類似した画面構成であり、歌絵模様であることも共通している。

柏原家所蔵の円山派衣裳下絵と密接な関係をもつ小袖類は、これまで文化6年(1809)に三井家より興入した女性のものでされてきた[2]。調査によれば、三井家より柏原家に入った女性は二人いるが、いずれも文化6年(1809)には興入していない。柏原家8代当主夫人・湧(1805-1867)は北三井家から文政5年(1822)に興入した。また、9代当主夫人・賢(1852-1931)も北三井家の出身で、慶應2年(1866)に柏原家8代当主の養女となった[3]。現存する洛東遺芳館所蔵の小袖類の着用者を特定することはできないが、従来考えられていた年代より下ることは明らかである。

(3) 亀居山大乗寺所蔵の円山派衣裳下絵

原寸大の円山派衣裳下絵は、当初、小袖の制作現場である越後屋(三井家が経営した呉服店)で制作・使用され、明治時代半ばに北三井家に集められたと考えられる。その一部が北三井家10代当主・三井高棟より円山派7代・円山応祥に譲られ[4]、現在ではその多くを亀居山大乗寺が所蔵している。

1975年に出版された『三井家伝来圓山派衣裳画』(白畑よし・切畑建著、紫紅社)には26件が掲載され、その内の19件が亀居山大乗寺所蔵と考えられていたが、この他に4件が所蔵されていることが明らかとなった。合計23件の調査結果は次の通りである。

- 1) 原寸大の模様がそれぞれ和紙に描かれている。小袖の形をしたものが19件、裾の部分だけを前後一続きとしたものが3件、断片に分かれたものが1件ある。小袖の形をしたものには、左右の前身頃2枚と後身頃1枚で構成されているものが17件(2件は一部が失われている)、小袖の形に貼り合わせたものが2件ある。
- 2) 23件の衣裳下絵の模様はさまざまであるが、通例の小袖模様と比較することによって用途を推定することができる。町方女性用16件、武家女性用3件、子供用3件、能装束1件と考えられる。

- 3) 町方女性用の模様は松竹梅、鶴亀が多く見られ、これらは典型的な吉祥模様であることから婚礼衣裳の下絵と考えられる。
- 4) 模様には円山派の特徴である写生にもとづいた表現や、三次元的な空間表現が多く見られる。また、小袖を一つの画面として見立て、きわめて絵画的に構成されているものもある。
- 5) 通常は小袖の模様とされない植物が2領に取り上げられ、文化学園服飾博物館所蔵の打掛や洛東遺芳館所蔵の打掛との共通性が見られる。
- 6) 「越三」の墨円印が捺されている衣裳下絵は21件、番号が記されているものは19件認められる。
- 7) 衣裳下絵には紙を貼って描き直したものや、朱で描き直したものが20件認められる。
- 8) 染織技法や色の指示が書き込まれているものが5件認められる。

衣裳下絵はそれぞれの筆致から複数の人によって描かれたことが窺われる。誰が描いたかは明らかではないが、いずれの衣裳下絵にも写生にもとづいた円山派の画風が顕著に認められ、また、円山派の絵画と共通する画題も多い。円山派の絵師の関与が考えられ、下絵を専門とする職人が描いたとしても円山派の影響はきわめて大きい。

衣裳下絵の描き直しについて、実際に着用する小袖としてより相応しい模様とするために変更されたと考えられる。見方によっては、描き直す前の方が絵画的には優れているという評価を与えることもできる。

(4) 京都国立博物館寄託の円山派工芸図案

京都国立博物館には、南三井家伝来の工芸図案集1巻が個人より寄託されている。この卷子についての詳細は明らかではないが、南三井家の明治時代の当主が円山派関係の資料を収集したことが知られ、これに関係するものではないかと考えられている。

- 1) 現在は卷子(幅:27.4cm、長さ:443cm)となっているが、小判の和紙に描かれたものを貼り込んでいる。小袖類の雛形図として12件を確認した。
- 2) 小袖模様の形式として、総模様4件、裾模様6件があり、模様のみ描いているものが2件ある。総模様については、すべて背面を中心とした小袖形に模様を描いている。裾模様については、左前身頃全体の形を表し、この裾部分に模様を描いたものが2件、後身頃と前身頃をつなぎ合わせた状態の裾部分を表し、これに模様を描いたものが4件認められる。
- 3) 総模様の下絵4件は、取り上げられているモチーフ、構図、表現方法などにおいて、原寸大の円山派衣裳下絵と共通性が見られる。
- 4) 色、染織技法などの書き込みが見られる。

この小袖雛形図が貼りこまれた卷子には、櫛と杯の雛形図も認められる。これは、小袖、櫛、陶磁器など工芸のいくつかの分野にわたって意匠を考案する者がいたことを示唆しているように思われる。したがって、この図案集の雛形図は、それぞれ専門分野の職人によって制作されたとは限らず、絵師が関与している可能性も考えられる。

(5) 福岡市博物館所蔵の小袖類の調査

小袖類8領の調査を行い、2領が本研究と密接な関連があると考えられる。「雀裾模様小袖」は刺繍と金砂子によって模様を表現したもので、三井家伝来の小袖類と染織技法の上で共通性が見られる。また、「松原道中模様振袖」の意匠は、円山派の絵画と画題が共通している。

おわりに

今年度は、三井家伝来の小袖類と円山派衣裳下絵、これらに関連する資料について、5 件の調査を行った。これまで存在が知られていなかった資料も含まれ、より多くの小袖と下絵の実態を把握することができた。これらの結果は、文化学園服飾博物館主催の展覧会「三井家のきものと下絵 一円山派がもたらしたデザインの世界一」(会期:10 月 22 日～12 月 19 日)と、文化女子大学秋期特別公開講座「江戸時代の小袖と呉服注文」(講師:長崎巖 開催日:11 月 24 日)に反映させた。

今年度の結果をふまえ、来年度は女子美術大学美術館所蔵品、国立歴史民俗博物館所蔵品、丸紅株式会社所蔵品などの調査を行う。また、円山派衣裳下絵と関連をもつ三井家伝来の小袖類が服飾文化史の中でどのように位置づけられるかを考察する。

文献

1. 白畑よし、切畑健著 :『三井家伝来圓山派衣裳画』紫紅社 1975
2. 同上
3. 三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会 :『三井八郎右衛門高棟傳』財団法人三井文庫 1988
4. 財団法人三井文庫 編集発行 :『三井家文化人名録』2002